

ダニエル書 - 第28号

壁

Jeff Pippenger

2023-12-23

ネブカドネザルは、再臨主義の始まり、アメリカ合衆国の始まり、プロテスタントの角の始まり、そして共和主義の角の始まりを象徴している。ベルシャザルは、これらすべての流れの終わりを象徴している。

ネブカドネザルは、1798年から1844年に至る第一と第二の天使の使命の歴史と、神の調査審判の始まりを表している。彼の証しは『ダニエル書』1章に対応している。ベルシャツアルは、1989年から日曜法に至る第三の天使の使命の歴史と、神の執行審判の始まりを表している。彼の証しは『ダニエル書』1章から3章に対応している。

ネブカドネザルは、獣の心で生きたのちにその王国が彼に回復されたとき、1798年にイスラエルの北王国に臨んだ「七つの時」の終わりを示す。彼の証言は、1844年にユダの南王国に臨んだ「七つの時」の終わりにおける調査審判の開始に至るまで続く。彼の証言において「時」という語は、第一の天使の裁きの時のメッセージを表し、さらにそのメッセージの到来も表す。彼の証言における「時」は、1798年と1844年の双方を指し、これらはそれぞれ第一の憤りと最後の憤りの終結を表している。

ベルシャザルの終わりは、二千五百二十に等しい神秘的な文字によって示されている。「七つの時」は、それが「時間」「散らし」あるいは「二千五百二十」として表されるにせよ、裁きの象徴である。ニムロデに対する裁きは「散らし」、ネブカドネザルに対する裁きは「七つの時」、そしてベルシャザルに対する裁きは「二千五百二十」であった。ネブカドネザルが三人の勇士を裁いたとき、彼は炉を通常よりも「七倍」熱くした。

「七つの時」の裁きは、第一のメッセージの到来時と第三のメッセージの到来時に印づけられている。1863年におけるミラー派アドベンチズムの終焉は、「七つの時」の教理の拒否から始まり、その126年後の1989年には、第三の天使の歴史における「終わりの時」が到来した。126は「七つの時」の象徴である。ゆえに、1863年の第一の天使の運動の終わりから、1989年の第三の天使の運動の始まりまでの間は、象徴的な126を通して「七つの時」によって橋渡しされている。

しかし、ダニエル書5章におけるベルシャツアルの没落の証言は、「壁」に書かれているにもかかわらず、「七つの時」のさばきを誰も見ることができないことを教えている。共和主義の角にとっては、そのさばきは、ダニエル書5章で取り払われるトマス・ジェファースンの「政教分離の壁」に書かれている。真のプロテスタントの角にとっては、そのさばきは、それを読む者が走るために「壁」に掛けられた二つの聖なる図表に書かれている。だが、ラオデキアの盲目のゆえに、その言葉は判別できない。いずれの場合も、そのさばきの言葉は、真のプロテスタントの角と共和主義の角の双方が天秤で量られ、不足とされたことを表している。ベルシャツアルの物語は、世界の諸国を表す共和主義の角に向けられたメッセージを持っている。

「ネブカドネザルとベルシャツアルの歴史において、神は今日の国々に語りかけておられる。」サインズ・オブ・ザ・タイムズ、1891年7月20日。

ベルシャツアルの物語には、世界の人々を代表するプロテスタントの角に向けたメッセージもある。

「ネブカドネツアルとベルシャツアルの歴史において、神は現代の人々に語りかけておられる。」Bible Echo、1894年9月17日。

ベルシャツアルの罪は、地の獣の二本の角の罪を象徴している。いずれの角にしても、その罪は、その真理を十分に知りながら、自らの基礎的な真理を拒むところに見いだされる。共和主義の角は、憲法の光と、その神的な文書が生み出された創始期の歴史に対して責任を負っているが、その光はその後しだいに退けられてきた。国家が竜のように語るとき、教会と国家の分離という象徴的な壁は取り払われているだろう。真のプロテスタントの角に関しては、土台が据えられたときの第一と第二の天使のメッセージの歴史からの光が、これまで漸進的に退けられてきており、今後もいっそう退けられ続け、ついには神の律法という「壁」も最終的に退けられるに至る。

ここで預言者は、世がこぞって真理と義から離れ去っている時代にあって、神の御国の土台となる原則を回復しようと努めている人々を描いている。彼らは、神の律法に生じた破れ口を修復する者たちである——その律法は、神がその選びの民を守るために彼らの周囲に設けられた城壁であり、その公義と真理と清さの戒めに従うことこそが、彼らにとって絶えざる守りとなる。

城壁を築くこの残りの民に与えられた具体的な務めを、預言者は曖昧さのない言葉で指し示している。『もしあなたが安息日から自分の足を引き、わが聖なる日に自分の好むことを行わず、安息日を喜びと呼び、主の聖なるものとしてそれを尊び、そして主を重んじて、自分の道を行わず、自分の好むことを求めず、自分の言葉を語らないなら、あなたは主のうちに喜びを見だし、わたしはあなたを地の高い所を歩ませ、あなたの父ヤコブの嗣業であなたを養う。主の口がこれを語ったからである。』イザヤ書58章13、14節。」預言者と王たち、677、678頁。

天使によってウィリアム・ミラーに啓示された聖書的な方法論は神の預言的法則を表しており、古代イスラエルとは異なり、現代イスラエルは十戒の律法だけでなく預言の保管者ともなるはずであった。

神は、古代イスラエルを召されたように、今日この時代にもご自分の教会を召し、この地上にあって光として立つようにしておられる。力強い真理の大なた、すなわち第一、第二、第三天使のメッセージによって、彼は彼らを他の諸教会と世から分離し、彼らをご自身との神聖な親しい交わりへと導かれた。彼は彼らを、ご自分の律法を託す器とし、またこの時代のための偉大な預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに託された聖なる神託と同様に、これらは世界に伝えるべき神聖な委託である。黙示録14章の三天使は、神のメッセージの光を受け入れ、神の使者として地の隅々にまで警告を響かせに出て行く民を表している。キリストはご自分の従う者たちにこう宣言される。「あなたがたは世の光である。」イエスを受け入れるすべての魂に、カルバリーの十字架はこう語る。「魂の価値を見よ。『全世界に出て行き、すべての造られ

た者に福音を宣べ伝えよ。』」この業を妨げることは、いかなるものであれ許されてはならない。これは現世における最重要の業であり、その及ぶところは永遠にまで広がるべきである。人々の贖いのためにご自身を犠牲としてささげ、そのうちに人の魂への愛を現されたイエスの愛が、すべての従う者を駆り立てるであろう。『証言』第5巻、455頁。

「天使によって授けられ、ウィリアム・ミラーの働きを通して確立された『預言の大きな真理』は、『世界に伝えるべき聖なる委託』である。十戒の律法、自然の法則、健康の法則、そして預言研究の法則は、同じ偉大な立法者によって与えられ、ひとつの戒めを退けることは、それらすべてを退けることに等しい。ウィリアム・ミラーに与えられた方法論を拒否したことは、漸進的な反逆の始まりとなり、最終的にはアドベンチズムが第七日安息日を拒むことへと至るだろう。」

この終わりの時代に、主は、ご自分の民であると称する者たちと争っておられる。この争いにおいて、責任ある立場にいる人々は、ネヘミヤが採った方針とは正反対の道を取るだろう。彼らは自ら安息日を無視し、侮るだけでなく、慣習や伝統という塵芥の下にそれを葬り去り、他の人々がそれを守ることができないようにしようとする。教会や野外の大集会において、聖職者たちは、人々に週の第一日を守る必要性を強く説くだろう。海でも陸でも災害が起きている。そしてこれらの災害はさらに増え、災いが間を置かずに次々と起こるだろう。そして、良心的に安息日を守る少数の者たちは、日曜日を顧みないことによって神の怒りを世界にもたらしている者たちだと非難されるようになる。

サタンは世界を捕らえ支配下に置くために、この虚偽を煽り立てている。人々に誤りを受け入れさせることが彼の計画である。彼はあらゆる偽りの宗教の布教に積極的に関与し、誤った教義を強要するためには手段を選ばない。宗教的熱心という外套のもとに、彼の霊に影響された人々は同胞に対して最も残酷な拷問を考案し、最も恐ろしい苦しみを与えてきた。サタンとその手先は今も同じ霊を持ち、過去の歴史はわたしたちの時代に繰り返されるだろう。

悪を成し遂げることを心に定め、意志を固めた者たちがいる。彼らは心の暗い奥底で、自分が犯す罪をすでに決めてしまっている。彼らは自己欺瞞に陥っている。彼らは神の正義の大原則を退け、その代わりに自分たちの基準を打ち立て、それと自分を比較して自分を聖なる者と宣言する。主は、彼らが心にあるものを露わにし、彼らを支配している主人の霊を行動のうちに表すことをお許しになる。主はまた、その律法の要求に忠実な者たちをどう扱うかを通して、彼らが主の律法を憎んでいることを示すのお許しになる。彼らは、キリストを十字架につけるよう暴徒を駆り立てたのと同じ宗教的狂熱の霊に動かされる。教会と国家は同じ腐敗した一致のうちに結び合わされる。

今日の教会は、古のユダヤ人が自分たちの伝統のために神の戒めを脇に置いたのと同じ道を歩んできた。教会は定めを変え、永遠の契約を破り、そして今も当時と同様に、高慢と不信と背信がその結果となっている。その真の状態は、モーセの歌の次の言葉に示されている。「彼らは自らを墮落させた。彼らの墮落は、彼の子らのものではない。彼らはよこしまにして曲がった世代である。愚かで思慮のない民よ、あなたがたはこのようにして主に報いるのか。彼はあなたを贖い取られたあなたの父ではないのか。」

彼はあなたを造り、あなたを堅く立てられたのではないのか。」
レビュー・アンド・ヘラルド、1884年3月18日。

アドベンティズムによる真理への究極的な拒絶は日曜法において起こる。アドベンティズムが古代イスラエルの歴史を繰り返して、そのとき「キリストを十字架にかけた暴徒を駆り立てたのと同じ宗教的熱狂の霊に動かされ、教会と国家は同じ腐敗した調和のうちに結び合わされる」からである。アドベンティズムの漸進的な反逆はエゼキエル書8章において、四つのエスカレートする忌むべきこととして表されており、それらは1863年に始まったアドベンティズムの四世代を預言的に指し示している。最後の忌むべきことは、エルサレムの指導者たちが太陽にひれ伏すときである。

彼はわたしを主の宮の内庭に連れて行った。すると見よ、主の宮の戸口、玄関と祭壇の間に、およそ二十五人の男がいて、彼らは主の宮に背を向け、顔を東に向けて、東の方の太陽を拝んでいた。そこで彼はわたしに言った。「人の子よ、これを見たか。ユダの家にとって、彼らがここでやっているこれらの忌むべきことは、取るに足りないことだということか。彼らはこの地を暴虐で満ちし、再びわたしを怒らせることに立ち返った。見よ、彼らは枝を鼻に当てている。それゆえ、わたしも激しい怒りをもって対する。わたしの目は容赦せず、憐れみもしない。たとえ彼らが大声でわたしの耳に叫んでも、わたしは彼らを聞かない。」エゼキエル書 8:16-18。

その時にもたらされる裁きは、ベルシャツアルの裁きの「時」に示されている。

王ベルシャザルは、その貴族千人のために大宴会を催し、千人の前でぶどう酒を飲んだ。ベルシャザルは、酒を味わっている間に、父ネブカドネザルがエルサレムにあった神殿から持ち出した金と銀の器を持って来るよう命じた。王とその貴族たち、王妃たちおよび側女たちがそれで飲むためであった。そこで、エルサレムにあった神の家の神殿から持ち出された金の器が運ばれて来た。王とその貴族たち、王妃たちおよび側女たちはその器で飲んだ。彼らはぶどう酒を飲み、金、銀、青銅、鉄、木、石の神々を賛美した。そのとき、人の手の指が現れ、王宮の壁のしっくいの上、燭台の向かいに文字を書いた。王は、書いているその手の一部を見た。すると王の顔色は変わり、思いが彼をかき乱し、腰の関節は緩み、膝と膝は触れ合って震えた。王は大声で、星占い師、カルデア人、ト者を呼び入れるよう命じた。王はバビロンの賢者たちに言った。この文字を読み、その解き明かしを私に示す者には、緋の衣を着せ、首に金の鎖をかけ、国の第三の支配者とする。そこで王のすべての賢者たちが入って来たが、彼らはその文字を読むことも、その解き明かしを王に知らせることもできなかった。そこでベルシャザル王は非常にうろたえ、顔色は変わり、貴族たちも驚きあわてた。
ダニエル書 5:1-9

ベルシャザルの裁きが下った「同じ時刻」に、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは、通常よりも「七倍」熱くされた炉に投げ込まれた。

さあ、角笛、笛、豎琴、サクバット、サルタリー、ダルシマー、ならびにあらゆる種類の音楽の響きを聞くと、ひれ伏して私の造った像を拝む用意ができていながら、それでよい。しかし、もし拝まないなら、その時ただちに燃える火の炉のただ中に投げ込まれるであろう。私の手からあなたがたを救い出せる神が誰だということか。シャドラク、メシャク、アベデネゴは王に答えて言った。「ネブカドネツアルよ、この

ことについては、あなたにお答えする必要はありません。もしそうなら、私たちの仕える神は、燃える火の炉から私たちを救い出すことができになります。王よ、また、あなたの手から私たちを救い出してください。しかし、たとえそうでなくても、王よ、私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝まないことを、どうかお知りおきください。」そのときネブカドネツアルは激しく怒り、シャデラク、メシャク、アベデネゴに向ける顔つきが変わった。彼は命じて、炉をふだんよりも七倍も熱くなるまで熱せよと言った。ダニエル書 3:15-19。

ベルシャザルに対する審判の「時」は、シャデラク、メシャク、アベデネゴに対する審判の「時」と同じであり、双方において「七つの時」がその審判の象徴として示されている。三人の義人は、日曜法における大地震の「時」に、雲とともに天に昇る二人の証人を指し示す旗印として表され、ベルシャザルは、まさに同じその「時」に地の獣にもたらされる国家的破滅という裁きを表している。

私たちは次の記事でベルシャツアルの裁きの学びを続けます。

私は、私たちの民の間における敬虔の水準の低さについて、深く心を痛めています。そして、カペナウムに下された災いを思うと、真理を知りながら真理に従って歩まず、自ら焚いた火の火花の中を歩む者たちには、どれほどさらに重い裁きがかかることかと思えます。夜ごとに、私はきわめて厳粛な調子で人々に語りかけ、彼らが自分の良心に問いかけるよう切に促しています。「私は何者なのか。私はキリスト者なのか、そうではないのか。私の心は新しくされたのか。神の変える恵みは私の品性を形作ったのか。私の罪は悔い改められているのか。告白されたのか。赦されたのか。私は、キリストが父なる神と一つであられるように、キリストと一つなのか。かつて愛したものを今は憎んでいるのか。かつて憎んだものを今は愛しているのか。私は、キリスト・イエスを知るといって卓越した価値のために、すべてのものを損と思っているのか。私は、自分がイエス・キリストに代価を払って買い取られた所有であり、あらゆる時に自らをその奉仕にささげなければならないと感じているのか。」

私たちは、重大で厳粛な出来事の入り口に立っている。全地は、大いなる深淵の水路を水が覆うように、主の栄光によって照らされることになる。預言は成就しつつあり、私たちの前には嵐の時代が迫っている。長い間鎮まっていたかに見えた古い論争はよみがえり、新たな論争も生じる。新旧が入り混じり、しかもそれは間もなく起こる。天使たちは、世界に対する定められた警告の働きがなされるまで、四方の風が吹き出さないよう押さえている。しかし、嵐は集まり、雲は重く垂れこめ、今にも世界に押し寄せようとしている。そして多くの人にとって、それは夜の盗人のようにやって来るだろう。

二十年も三十年も前に、日曜遵守が全世界に押しつけられ、その遵守を強制し、良心の自由を抑圧する法律が制定されるだろうと私たちが告げたとき、多く人は笑って信じようとしなかった。私たちは、それが成就しつつあるのを見ている。神が将来について語られたことはすべて必ず実現する。語られたことは、一つとして地に落ちることはない。プロテスタントは今や深い溝を越えて手を差し伸べ、教皇制と手を結ぼうとしており、第四の戒めの安息日を葬り去るための連合が形づくられつつある。そして、サタンの扇動によって、教皇制の子である偽りの安息日を制定したこの不法の人が、神に取って代わるかのように高く掲げられるであろう。

私には、全天が出来事の展開を見守っていると示されている。地上における神の統治をめぐる大きく長期にわたる論争の中で、危機が明らかにされようとしている。偉大で決定的な出来事が、しかもまもなく、起こるはずである。もし少しでも遅れるなら、神の御品性とその御座の権威が損なわれることになる。天の兵器庫は開かれている。神の宇宙全体とその装備一切は準備が整っている。正義がただ一言を発すれば、神の怒りの恐るべき現れが地上に起こるだろう。声と雷鳴と稲妻と地震があり、全地的な荒廃が起こる。天の全宇宙におけるあらゆる動きは、世界をその大いなる危機に備えさせるためのものである。

激しさが地上のあらゆる要素を支配しつつある。大いなる光と驚くべき知識を与えられてきた民でありながら、その多くは、眠っている五人の乙女にたとえられる。ともしびを手にしているが、器には油がない。冷たく、無感覚で、信心は弱く、衰えつつある。最後の大きいなる闘争に備えて、下から新しいいのちが広がり芽生え、サタンのあらゆる勢力を急速に取り込みつつある一方で、上から新しい光といのちと力が降り、いま多くの者が背きと罪のうちに死んでいるが、そうではない神の民をとらえている。いま目の前で進行していることによって、間もなく私たちに臨むものを見抜く人々は、もはや人間の策に信頼せず、聖霊は認められ、受け入れられ、人々の前に掲げられなければならないと感じ、神の栄光のために戦い、同胞の魂の救いのために、人生の大道と小道の至るところで働くようになる。確かで不動の唯一の岩は、とこしえの岩である。この岩の上に建てる者だけが安全である。

今なお肉の思いにふける者たちは、神の御言葉において、またその御霊の証しによって与えられた警告にもかかわらず、贖われた者たちの聖なる家族と決して一つになることはない。彼らは肉欲的で、思いにおいて墮落しており、神の御目には忌むべき者である。彼らは真理によって聖別されたことがない。彼らは神の性質にあずかる者ではなく、自我と、この世の持つ愛着と情欲とに打ち勝ったことがない。こうした者たちが私たちの諸教会の至る所におり、その結果、教会は弱り、病み、死に瀕している。今は生ぬるい証しをしてはならない。むしろ、断固とした、的を射た証しをし、あらゆる汚れを戒め、イエスを高く掲げなければならない。私たちは民として、期待の姿勢を保ちつつ、働き、待ち望み、見張り、祈らなければならない。

「キリストの再臨というこの祝福された希望は、その厳粛な現実とともに、しばしば人々に示されなければならない。栄光のうちに間もなく来られるわたしたちの主イエスを待ち望むことは、地上の事柄を空虚で無に等しいものと見なすことへと導く。世のいかなる誉れや栄達も価値はない。まことの信者は世を超えて生きており、その歩みは天へと進んでいるからである。彼は旅人であり寄留者である。彼の国籍は天にある。彼は、世界を包み込んできた道徳的暗闇の中で燃え輝く光となるために、キリストの義の陽光をその魂に集めている。彼のうちには、なんと力強い信仰、なんと生き生きとした希望、なんと熱烈な愛、なんと聖く献げられた神への熱心が見られることか。そして、彼と世との間には、なんと明確な相違があることか。『だから、いつも目を覚まし、絶えず祈りなさい。これから起こるすべてのことから逃れ、そして人の子の前に立つにふさわしいと認められるために。』『だから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主がどの時に来られるかを知らないからである。』『だから、あなたがたも用意していなさい。思いがけない時に人の子は来るからである。』『見よ、わたしは盗人のように来る。目を覚まして自分の衣を守る者は幸いである。』」小冊子、38-40。

